

【研究論文】

御殿形厨子の研究（5）
— 石灰岩・サンゴ石製石厨子の編年 —

A study on the urns of palace style (5)
— Chronological typology of the stone funerary urns (Ishizushis) —

宮城 弘樹
Hiroki MIYAGI

1. はじめに

筆者は「御殿形厨子の研究（1）」（以下、研究（1）と略）で紀年銘資料を集成（宮城2019）、「研究（2）（3）（4）」では陶製御殿形厨子の編年研究を行った（宮城2020ab、2021d）。御殿形厨子の研究課題として、石製の御殿形厨子、特に石灰岩あるいはサンゴ石で作られた「石厨子」については編年研究に課題が多いことを指摘した。本論では、おおよそ陶製御殿形厨子に並行する石厨子^{（註1）}の細分編年研究を行うことを目的とする。

研究方法は、研究（2）（3）同様紀年銘資料を定点とし型式学的検討を中心に行う。

2. 研究略史

石厨子の研究は陶製御殿形厨子同様、1980年上江洲均によって行われた編年研究（以下上江洲編年と省略）を端緒とする。上江洲編年では石製厨子を石材で分類し、各石製厨子の年代を銘書から、輝緑岩製は1494、1501年などを紹介し彫刻や技術の高さを指摘する。石灰岩製石厨子は天敬5年（1625）を最古例とし玉陵の例から1500年ころから約200年間使用されたとした。凝灰岩製は事例が少ないながらも1666年、1720年、1731年の紀年銘資料および鹿児島島の材であることなどから17世紀から18世紀代のものであると位置付ける。サンゴ石製は元来支配者層のものであったものが民間へ普及したものと、紀年銘資料が康熙年製のものが古く、18世紀半ばころまでつくれ時代が下ると入母屋が寄棟になり鯪がつくと指摘した（上江洲1981）。

御殿形厨子において、石厨子を対象とする考古学研究は、陶製に比べ多くの研究者によって分析されてきた。中でも古式とされる、玉陵、浦添ようどれ、伊是名玉御殿、小禄墓などの輝緑岩製石厨子への関心が高い。本資料群は玉陵の報告書の中で彫刻の特徴や類例資料が紹介され詳述されている（玉陵復元修理委員会1977）。その後、上原静によって輝緑岩製石厨子の型式学的研究が行われた（上原2000）。また、安里進は、浦添ようどれや伊是名玉御殿の石厨子を紹介し、詳細な検討を加えている（安里2006）。

一方、石灰岩製石厨子については、輝緑岩製の石厨子に後続するものとして位置づけられている。本資料は主に行政における緊急調査の対象となり出土例も多いことから、いくつかの発掘調査報告書で資料紹介と合わせて分類が行われている。例えば、古我地原内古墓では屋根形状等に着目し分類が行われた（沖縄県教育委員会1987）。また、銘苅古墓群では、銘書資料から16世紀後半～17世紀に製作されたとして、首里士族を中心とする那覇市域の石厨子の出現傾向について、中部地域では19世紀まで製作される例もあるとし那覇市域の特徴と地域性を指摘している。なお、分類呼称として家、民家、御殿と呼称しその造形から分類する（金武2007）。他に、上原静は御殿形（家屋形）の祖型を日中の仏塔、本堂そして首里城正殿等を具体的にあげ仏教的世界のデフォルメと論じている（上原2017）。

石厨子に関する型式学的研究は、大堀皓平により継続的に分析が試みられている（大堀2013・2016・2019）。大堀は、輝緑岩製が15～16世紀頃に存在し、玉陵の琉球石灰岩製の石厨子に16～17世紀頃に簡素化し移行するとした。これを祖型としてサンゴ石主体の近世石厨子系統が登場すると理解した。また、玉陵の石灰岩製石厨子について被葬者順に並べ、型式学的な序列を屋根形式、装飾方法に着目し変遷過程を解説している。大堀はこれまでの研究を継承し総括するとともに、型式学的な解釈を試みる。しかし、石灰岩製石厨子の初期的型式について細分案を示すものの、18世紀中頃から近代の石厨子についての細分編年は未着手となっている。

筆者は石厨子の型式学的理解には「可塑性が高い陶製厨子を基幹とし、石製厨子について検討することが研究手順とし有効」と指摘した（宮城2019:11）。しかし、具体的な編年案の提示は行っていない。

以上、本論では1600年代以降主体となる石灰岩・サンゴ石製石厨子の細分編年研究を行い、これまでの研究で指摘される課題に応えたい。

3. 分析対象資料の概要

本論は、輝緑岩製石厨子を除く石灰岩、サンゴ製石灰岩を材とする石厨子を総じて石灰岩石厨子（以下単に石厨子と記載する場合は断りの無い限りこれを指す）として呼称し、これを分析対象とする。凝灰岩やニービとされる石製厨子もおおよそ並行関係にあると推測されるが、これは形態的には類似点はあるものの、少数であるため参考資料にとどめ検討対象からは除外した。

石厨子の装飾は彫刻による屋根の鯨、懸魚、垂木と身の獅子、龍柱、僧形と彩色による文様などがある。文様のモチーフは様々なバリエーションが認められ、墨や朱、緑、青色の顔料が認められる。この石厨子各要素の経時的变化や系譜関係を明らかにすることに主眼を置いた。主として身の正面意匠を中心に蓋の屋根形態を加味させ型式学的分析を行う。

考察の対象とする石厨子は、身・蓋がセットで出土、あるいは博物館等に収蔵されているものを中心に型式分類する。研究（1）で集成したものに、拙論刊行以降行った集成（宮城2021a）、筆者が調

査に関わることができた平安座島のトゥダチ墓（宮城2020cd）の銘書資料を加え、各型式の年代比定を行う。筆者集成の資料に追加の資料を加え資料134点を分析対象とする。

4. 分析属性の抽出

型式学的検討を行うに際し、石厨子の特徴を列記し各分析属性を抽出、分類、呼称統一を図る（図1）。石厨子は、身と蓋のセットで御殿形（家形）となる。蓋は屋根、身は身舎部分となる。

蓋の屋根形式は入母屋、起り屋根、宝珠鯨が大棟に乗るもの（入母屋と寄棟）、寄棟、重層、宝形の5種確認されている（図1-⑦、以下図1は省略）。主体となるのは宝珠鯨が付されるのも含み入母屋がほとんどで、寄棟が新出となるが、これも妻部分が省略され入母屋が略化したと目されものがある。なお、屋根上面は基本凹凸が無く平坦で、しばしばここに文様を施すものがある。大棟中央には、屋根飾りが付されるものがある。付される飾りは宝珠に限られる点は陶製御殿形の屋根中央飾りのバリエーションとは異なる。なお、宝珠も形態的には上部が山なりになって尖る擬宝珠形となるが、頂部の尖りがほとんどないもの、彫刻の痕が残る多角形の角錐もみられ、これは擬宝珠形が略化したものと推測された。

蓋軒（垂木表現）は基本的には立体的な表現で、垂木に彩色を加えるものが認められる。陶製の赤焼御殿形では古式のもの垂木を彫刻し、やがて略化し彩色した垂木表現への推移が確認されていることから、分類にあたってはこれに倣った。なお、垂木を二重表現するものも見られ、これを二重垂木とした。二重垂木には、しばしば大棟と降棟が付されるものがある。また、二重垂木は、玉陵や刃土名家の墓（玉城朝薫の墓）15号蔵骨器など階層上位の墓に安置される石厨子にみられる。垂木表現は扇垂木になるものは古式の精巧なものに多く、概して平行垂木のもものが後出する。加えて、垂木の特徴については上原静によって中国様（輝緑岩）にはみられない特徴で、日本建築の写しとし、日本からの影響が指摘されている（上原2017:295）。

大棟は、方柱状あるいは円柱状のもものが付されるものが稀にある。しかし、ほとんどはこれが乗らないものである。棟両端隅の装飾に鯨が棟を咥え左右に配置されるものがみられ、これは屋根中央飾りの宝珠とおおよそセットとなっている。鯨は陶製御殿形を参考にすると、小形で魚体意匠を残し体部が相対的に細く妻の外に尾びれが出る鯨から、鯨が簡略化し屋根中央飾りに鯨の口が接するものでかなり魚体意匠が崩れたものへと移行するとして分類した。陶製御殿形厨子に比して石は可塑性に乏しいため形態を明確に分類し難いものの漸次的ながら、おおよそ魚体が細身で反るもの、鯨はデフォルメされるが宝珠とやや距離があるもの、宝珠と鯨の距離が近く鯨の頭部が大きく造形されるもの、ほぼ宝珠と接し鯨の造形がほとんど略化したものの4種程度に類別可能である。降り棟は、起り屋根の資料にしばしば認められる。事例数は多くないが降り棟の先端に獅子などの意匠が付されるものもある。

身は、いずれも四脚稀にベタ底で、正面から見て高さと同幅がおおよそ1：1となる方形、あるいは

はやや横長のタイプ、縦長のタイプがあり、ベタ底（タイプiv）の中には底幅に比して口縁部の幅がやや長くなる台形のものがある。台形の資料は管見の限りいずれも久米島の事例で石厨子の造形には地域性も考慮されるべきと考えられる（⑥台形形・図8-80）。

厨子の大きさについては、蓋（屋根）を含む総高と最大幅を抽出し、傾向の把握を試みる。

身正面の意匠は、方形区画を彫刻するものと、彫刻と着色の併用、および着色のみによって区画文とするものがある（⑥）。着色区画文は柱などの意匠であることが指摘されている（上原2017:295）。しかし、その初期は別としても、全てが建物の柱意匠として装飾されたものではないとも考えられる。なお、区画文の無い無装飾のものも認められる。身正面彫刻意匠は基本的には左右対称で合掌する僧形、獅子、香炉、龍柱、階段を配するものが確認される。身正面に屋門を彫刻あるいは彩色で意匠を持つものがあるがこれも少数である。銘書面形状は長方形、鳥居形などがあるものの陶製御殿形が銘書面を必ず意匠するのに比べ少ない（⑤）。

身正面中央には透かしがある。透かしは配置や形状のバリエーションが豊かである。総じて無孔、正面の左右に2つ以上の穴を対で穿つものを多孔、正面に3つ以上の穴を穿つものを正面多孔、左右に1対の穴を穿つものを1孔対、方形の穴が隅丸方形になるものなどは1略孔対と呼称し、それぞれに名前を付けた（②）。

最後に、底部の意匠として腰（③）、脚・股内割（④）の意匠、蓋断面の削りの深いものから浅いもの（⑧）などにもバリエーションが認められる。

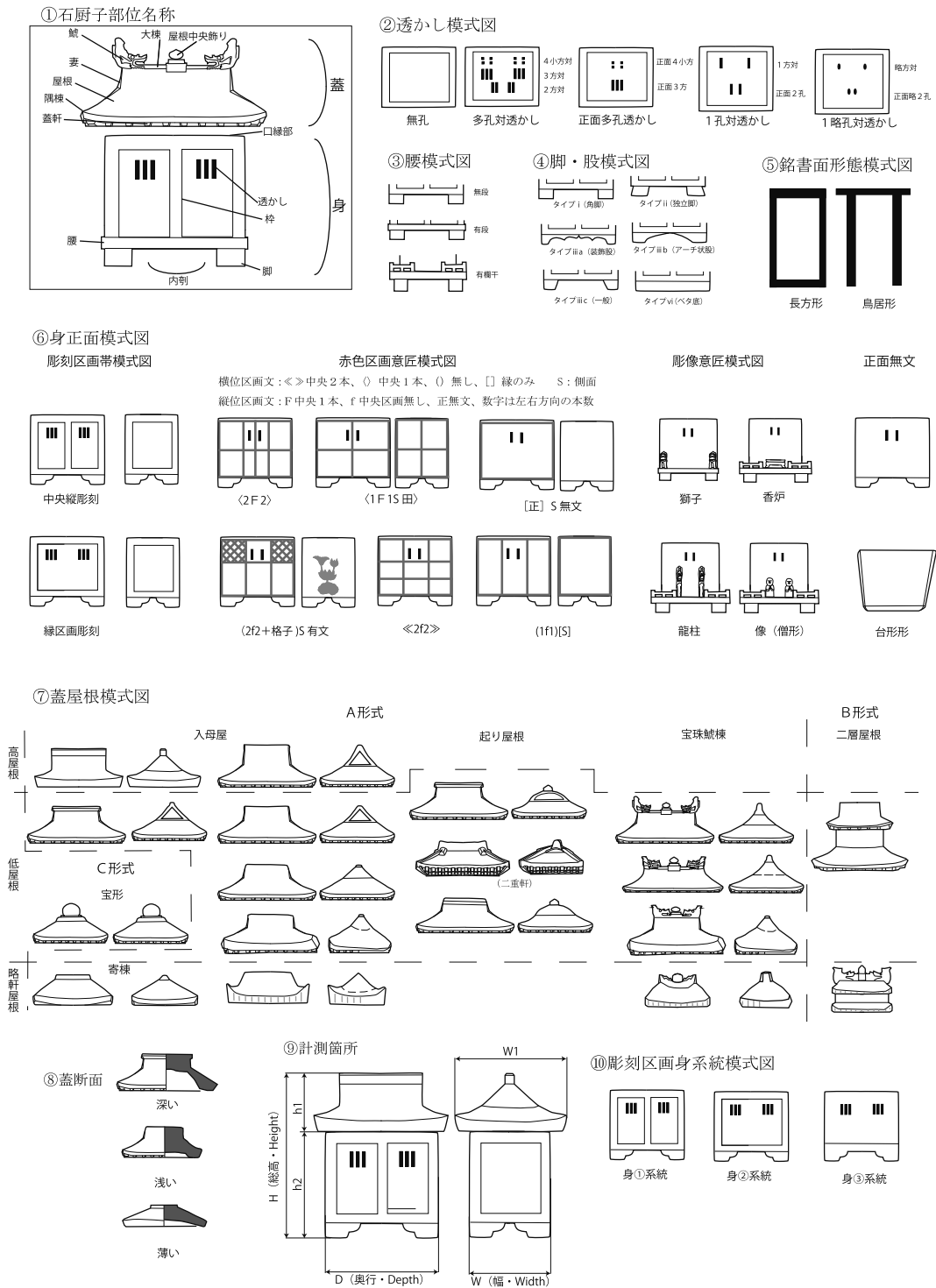


図1 石厨子の各属性の分類模式図

5. 型式分類

分析対象とした石厨子は、屋根の形態から以下の3形式に分類した。これは陶製で分類したものと同様の形式分類となる。ただし、C形式は稀で、筆者管見の限りうるま市江洲按司・ノロ墓^(註2)などわずかな事例となっている。

A形式（単層系）：入母屋、起り屋根、寄棟

B形式（重層系）：重層

C形式（宝形系）：方形（宝形）

次に身の正面意匠、屋根形式などの属性から6型式に大別し、これを各2～4型式に細分した。

1式：身に透かしの無いものを1式とする。A形式のみ確認されている。1式はさらに、蓋屋根形態から、急こう配で高さがあり反りの大きい高屋根のaと、勾配が緩やかな低屋根bの2型式に細分した。身正面は彫刻区画ないしは、無文を基本とする。彫刻区画は中央縦彫刻と縁区画、区画の無いものがみられ、区画のあるものが主体とみられる。紀年銘資料がないことから分類に示していないがこれ以外にも三分割するものも認められる〔図4-14〕。1aは腰の段の有無があるが、総じて無いものが主体となる。脚の形状は角脚がほとんどで、内刳も直線的となる。区画内には僧形図が彩色によって描かれる。なお、僧形図が描かれるのは玉陵の主に国王および王妃のものに限られ、モチーフは顔料を用い袈裟を着た僧侶が描かれている（玉陵復元修理委員会1977:64）。尚元王妃石厨子〔図4-1〕は最も精巧で僧形の輪郭が陰刻され、これに着色して描かれる。僧形の多くは錫杖などを持った六地藏様の図案で、これも陶製御殿形の赤焼に見られる図案と共通性がある。後述する4式の合掌する僧形とは異なる。4式の僧形は上焼御殿形や甕形のマンガン掛けの貼付文と共通する。銘書は彫刻したいわゆる刻字が古式と推定されており（高良1984）、墨書はこれに後続するとされる。ただし、無記名のもものも多い。

蓋平部には基本瓦意匠はない。ほぼ唯一、尚元王妃石厨子〔図4-1〕は軒に並行する板葺き様の彫刻がみられる。1式は例外もあるもののほぼ入母屋に限られる。勾配のある降り棟が無い屋根で、妻が高い点が最大の特徴である。妻部分が陰刻され懸魚は着色される。大棟を持つものは少なく、軒は彫刻により立体的なものと、軒の彫刻の無い形態ものも見られる。蓋断面は、実見が困難な資料が多く、図化資料にも乏しいため断定的には言えないものの、深いものと推測した。

2式：1bと同様で、正面意匠は彫刻区画対および無文のものとした。透かしが多孔対もしくは正面多孔透かしとなるものをa、2孔対のものをbとした。

3式：正面意匠が赤色区画のものである。3式はさらに、蓋屋根形態から入母屋の大棟装飾に鯪の無いaと大棟中央飾りに宝珠、両端に鯪が大棟を加えるbに細別した。さらに3a・3bは、それぞれ軒を彫刻表現とする1と彫刻表現の無い2に細分する。後者は屋根勾配、大棟装飾など総じてデフォルメされている。

3-4式：正面意匠に赤色区画のある3式の特徴を持ちながら、身正面に龍柱や香炉が付されるものを

3式と4式の両方の特徴を持つ資料とし、3-4式とナンバリングした。将来的には本型式を2分して3式と4式に分かつか、あるいはナンバリングを見直すべきと考えるが、これは陶製御殿形厨子や厨子甕などを含めた総括的な編年を行う際に検討することとして、本論では暫定的に3-4式の仮称のまま検討を進める。

4式：区画文の無いもので、正面に彫刻意匠を施すもの、僧形や香炉、階段などを陽刻するものをaとした。また、腰以下に厚みを持つもの、身正面に凹凸の無い平坦なものをbに細分した。bには様々な文様が描かれるものが多い。透かしは1略孔対透かしとなる。4式の屋根には宝珠鯨が大棟に付されるものが多くなり、基本寄棟造となる。

5式：正面に僧形が陽刻され、鳥居形の正面銘書面のデザインが特徴的な資料。縦長の身に二重軒の屋根が乗る。全体的に彩色される点に加え透かしの無い点も本型式の特徴となる。透かしの無い無孔である点で4式と分けたが、暫定的なものとしておきたい。なお5式の無装飾の一群を5'とする。後述するが、これは無孔の1式の系譜で2・3式に並行する粗造の資料と解釈するか、5式の範疇とするかについて紀年銘資料が少なく時間的位置付けと整合しない部分がある。一見して粗造で小型不均整の器形となることから1式とは分けられるが仮に5'として類別しておく。

6. 紀年銘石厨子の集成（付表）

本論では、これまでの研究手法を踏襲し、紀年銘をもつ厨子（石灰岩石厨子に限定）を集成する。紀年銘石厨子は筆者が行った銘書集成資料から188点を再集成した。これに、図版等が無いあるいは元号はあるが年を確定できないものなどの資料を除いた134点の紀年銘資料を対象に検討していく。どの年代を定点とするのかについては、これまでの陶製厨子の分析同様、洗骨年を調達年に近いとしてこれを基準とした。複数の被葬者の場合は新しい方を基準年とした。また、各型式の製作年について統計的手法を用い、分布が密なところを石厨子の製作年代と推定し各型式の年代付与を行う。統計によって導き出された参考年は型式によって少ないものもあるため、一部では紀年銘資料以外の情報も参考とした。なお、陶製厨子と異なり、石厨子は以下に示すような資料的特質があるため、留意事項として特記する。

陶製御殿形厨子が壺屋など基本的に特定の地域で生産され流通するもので、相対的に型式変化が追いやすいのだが、石厨子はそれぞれの地域で製作されたことが考えられ、地域的な形態変化もあって、陶製に比しやや複雑となる。

石厨子はしばしば墓室の正面棚中央などに配置される。これらは宗主の被葬者やその家系でも中心人物を納骨する場合が多い。このため墓室内の象徴的な蔵骨器として使用される場合がある。このような厨子ではしばしば象徴性が重視され、後年情報が追記されるなど、古い年代や新しい年代が追記される場合があり、紀年銘が必ずしも調達年に記載されたとは限らない。その可能性は、陶製に比べ相対的に高いのではないかと考えられる。

資料特性としての上記可能性を排除する方法として、今回も統計的手法を用いる。年代の散布図とあわせて、箱ひげ図を用いこれを示した(図2)。新しい年代や古い年代を統計的に外れ値として示すことで、調達年よりも古いか新しい記載である可能性があることを指摘可能となる。本論で示した型式ごとに年代の集まる範囲をその型式の主たる存続期間と捉えておきたい。なお、上記の課題解決のためには陶製御殿形および甕形と各形式を俯瞰し系統や並行関係の把握を行うことが必要と考える。また、厨子全体の型式学的考察を行い、紀年銘のみに依拠せず遺跡の出土状況などからより実証的に統合的な編年が行われるべきであくまでも暫定的な編年案としておきたい。

7. 石厨子の型式変遷

①紀年銘資料 各型式の紀年銘資料の年代分布を図2に示す。1式は17世紀第1四半期～第3四半期に分布の中心があり、1aが17世紀前半に偏る。1bには古い年代を含み偏りはみられないものの、型式学的見地から1aより後出するものと理解した。2式は17世紀第4四半期～18世紀第1四半期に多く分布する。3式は17世紀末頃～18世紀第2四半期にあり、3aが17世紀末～18世紀中頃に分布する。3-4式は18世紀第2四半期にみられる。これは後述する4式との型式交代期と推定され、3式と4式の両者の属性をもつもので、この頃に両型式が併存したと捉えられる。4式は18世紀第3四半期～19世紀前半期に分布する。5式は資料数が少ないため、やや幅を持たせ「昭和のはじめ頃まで石厨子をつくった(上江洲1980:357)」という聞き取りから、この頃まで製作された石厨子を本型式と類推し、19世紀第2四半期が下限になるものと仮定した。

以下、個別に見ていく。図4～8に本論で細分編年を考察するにあたり紀年銘を持つ石厨子を中心に

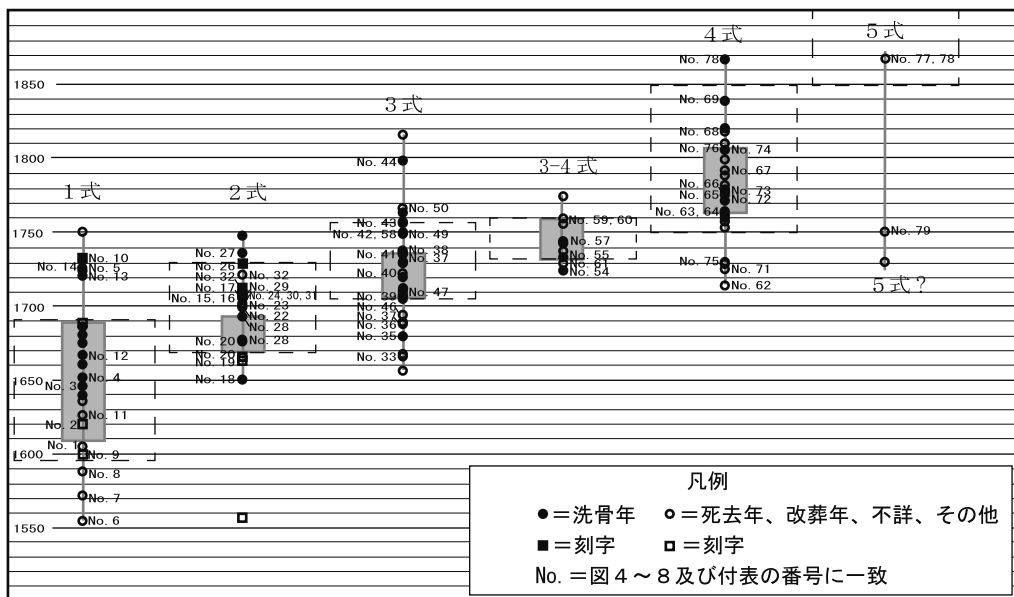


図2 石厨子の紀年銘散布図

に掲載する（以下図番号は省略資料〔No〕で紹介する）。

〔1～10・15～17・23・29・33〕は、玉陵に安置されている厨子で被葬者名や死去年等が銘書されている。実際には、王名のみで紀年銘が無いものも少なくないが、古文書の『王代記』や厨子内に伴う誌板などの記録を参考に、その製作年代を比定することがこれまでも行われてきた。

例えば、玉陵に安置された石厨子の資料群について、大堀（2019）は型式学的検討を行っている。筆者も研究（1）でこれを並べ報告した（宮城2019:5〔註3〕）。大堀は玉陵の石灰岩製石厨子資料群を「玉陵系統」として輝緑岩製のA系統から、入母屋屋根の在地化したB系統と大棟が肥大化したC系統に区分する（図3）。さらにB・C系統を細分しA→B1→B1・B2併存→C1→C2→C3の系統関係で整理を試みている。なおC3は上焼本御殿形

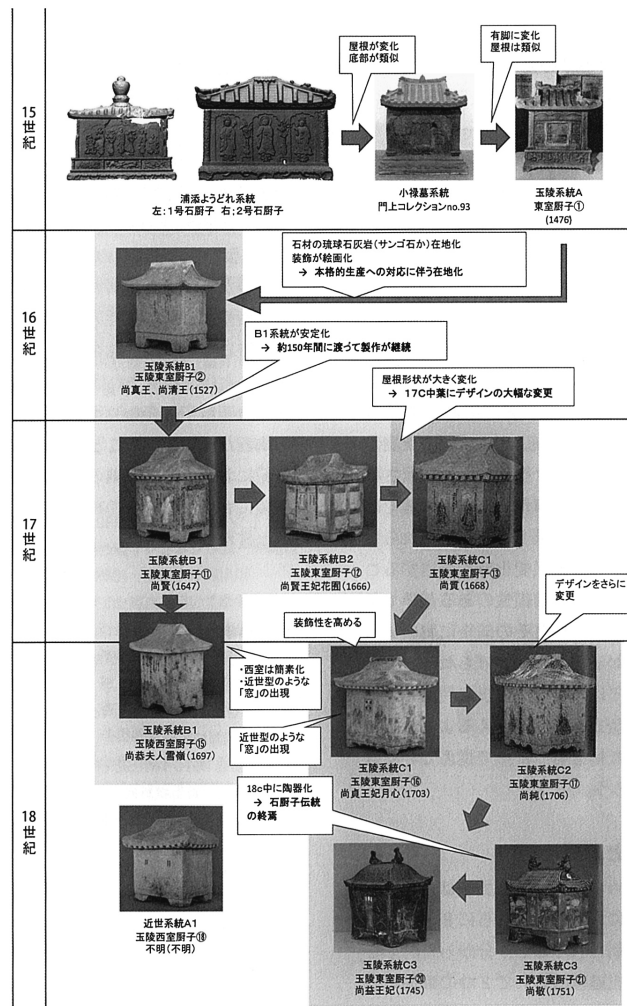


図3 大堀（2019）による玉陵内の石厨子の形式学的分析

の陶製厨子で、玉陵石厨子のC系統を陶製厨子の祖型と解釈している（註4）。屋根の扁平化、透かし（大堀論文では「窓」）の出現を指摘する点は後述するとおり本論と整合的である。しかし、系譜関係や分類の枠組み、没年を基準年として全て後に記されていないという仮定にはやや問題があると考えている。

特に、玉陵東室厨子⑫〔33〕をB2として、B1→C1の間に位置づけるが、形態的には共通点が少なく、年代的な位置づけを留保しても、B1とC1の間に置いてこれを介し連続性があるとの説明はやや合理性を欠くのではないかと筆者は疑問を持っている。大堀論文が系統としては玉陵に限定して論じたという制約があるにせよ、B→Cの型式変化について、筆者はこれを支持せずB・Cともに形態的に変化しながらも併存する系譜関係があると想定した。

その根拠とするものは、大堀も課題として指摘するとおり、本資料群を考える上で一つ定点となっている紀年銘（王死去年）＝製作年とする年代解釈の問題があると考え。具体的には、玉陵墨書銘

書がその記載年代と同時代に記載されたか否かという点につける。大堀はこれについて「課題が残る」としながらも、結論としては「時間的な基準として十分機能する」として、この課題を等閑視し全て記載の年代を前提とし型式学的位置づけを論じている。

この資料群の銘書に関しては、文献史学の立場から高良倉吉によってかなり明快に矛盾点が指摘されている（高良1984）。やや長文になるが、重要な指摘が多く含まれるため紙幅を割くがなるべく簡潔にまとめる。

高良は玉陵の石厨子について、修理報告書を丁寧に読み解き、古琉球から近世琉球のある時期までは刻文の事例が全てで、玉陵の各王たちの石厨子がなぜ墨書なのかとして、その矛盾を指摘する。その上で、各王の石厨子は近世のある時期以後に書かれた可能性が高いと説く。その時期について、古琉球の石厨子のほとんどが刻字であるのに対し、墨書銘の石厨子が玉陵内の尚真、尚清などの古琉球石厨子にあることに疑問を呈し、その年代について考察する。具体的には、同時代性の高いものを、尚豊〔3〕、尚賢〔4〕の銘書と指摘する。この銘書は明清交代期の弘光2年（1646）、隆武3年（1647）、隆武7年（1651）の年号が墨書されるが、いずれも改元され、その後の琉球国の正史などでは清朝の元号が用いられるため、実際には存在しない年を琉球が明遺臣政権の元号を用い続けたもので、清元号に転換するまでの時期に記載されたとした。墨書記載形式が玉陵で出現する上限を1650年代初期と結論付ける。さらに、浦添ようどれの尚寧王石厨子〔2〕が1620年代で石灰岩製、かつ刻字であることを確認し、これらを整合的に解釈すると、墨書は1620年代から40年代のある時期に成立したとするのが妥当と結論付ける。墨書の登場年と、尚真・尚清〔6〕、尚賢〔4〕、尚質、尚益〔5〕の石厨子銘書の年代は古いにもかかわらず刻字でないことが整合せず、この墨書は1640～50年代に記載された可能性があるとした。なお、高良はあくまでも銘書について論じており、石厨子の型式との関係性については言及していない。

上記指摘を前提にすると、尚真・尚清〔6〕、尚元〔7〕、尚永〔8〕の記載されている墨書年は16世紀まで遡るものの、それは100年近く経た、後世に記載された可能性があるというのである。仮にこれを前提とすると、約100年にわたりB1系統が安定的に製作されたとする大堀の石厨子に関する変化の乏しさという評価は、むしろ17世紀の上半期の短期間の中で墨書とほぼ同時代に製作されたために起こったという評価が可能で、型式変化の乏しさも、筆者仮説を支持する要素と考えている。

以下、具体的に検証していく。最初に考察すべきは、東室⑩被葬者尚賢王妃の被葬の経緯である。この被葬者は乾隆16年（1751）に別の墓から移葬された記録が残されている（玉陵復元修理委員会1977、福地2008）。この厨子が移葬前から遺骨を納めた器で、器ごと玉陵に移されたものであったことに問題があるわけではないが、移葬時に調達された可能性も高く、玉陵に当初より安置されるために用意された玉陵系統の石厨子に並べ議論するべきかについていったん本石厨子を保留し、まずは玉陵の中での石厨子の型式の変遷を考えていきたい。

2点目は1点目のこの東室⑩被葬者尚賢王妃石厨子〔33〕を除くと、どの時点で透かしが登場する

のかを確認したい。最初に透かしが現れるのは1707・1709年洗骨の東室⑭・⑯・⑰〔15・16・17〕の資料、もしくは東室⑮尚貞王〔29〕（1700年死去）の資料となる。玉陵において透かし出現年の一つの定点が18世紀初頭という位置づけが可能と考える。ただし、玉陵を除く幾つか透かし多孔の資料〔18・19・20〕の銘書にも1660年前後のものがみられる。また、既に陶製厨子では17世紀中頃で透かしが認められており、透かしの出現期については玉陵とそれ以外で異なる可能性が高い。なお、一部に例外もあるが透かしの形も小方孔を組み合わせた複数孔となる点が17世紀の紀年銘を持つ資料に共通する。いずれにしても、この点はもう少し詳細を検討が必要と考えているが、ここでは玉陵の資料群における透かし登場の年代が1700年代はじめ頃であることを確認し論を進める^{（註5）}。

3点目は大型傾向について確認したい。上江洲は「どっしり」と表現したが、玉陵にある透かしの無いものはそのサイズが総高80cmを超えるものがほとんどで、2式以降の製品に比べて大型と言える。ただし、これも時代性というより、国王墓の厨子の特徴の一つである可能性が考慮されるだろう。この大型傾向は、浦添ようどれの石厨子〔2〕とも共通する。他にも浦添ようどれ資料と玉陵で共通するのは正面彫刻区画、高屋根、妻の陰刻、僧形の絵画、懸魚の陽刻装飾などをあげることができ、丁寧な仕上げであることが共通している。

4点目は身形態への着目である。すでに屋根形態等の変化については、上江洲編年で「入母屋で、装飾は極めて少ない。屋根の軒には四角い垂木をつくっている。このころのものは洗練された整った形のものが多く見受けられる。（中略）屋根が二重になっており、棟にシャチホコがついている。このタイプでは、18世紀半ばごろから多くなる傾向がある。時代が下るにつれ、入母屋が寄棟になり、シャチホコがつく（上江洲1980:357）」と述べその方向性について言及する。また、上原静は、16世紀前半から17世紀に反り屋根形、17世紀後半から18世紀に起り屋根形が出現すること。後続する石厨子が含まれるが、細かな表現が簡略化する傾向。長押や基台の境を浮き彫り、朱で線描すること。加飾化した御殿形が加わることなどの型式変化の方向性について触れている（上原2017:295）。さらにこれらの指摘について、大堀もおおよそこの型式変化の方向性を追認している（大堀2019）。屋根形態については筆者もこれまでの指摘の方向性に異議はない。その上で、紀年銘を扱い編年を行う上で注意されるのは身と屋根が完全なセットになるのかどうかという点で、ここにはやや注意が必要であると考えている。特に玉陵は戦災によって大きく破損し、十分な検証がされたとはいえ、復元整備された経緯から誤った屋根が載せられている可能性を完全に排除することはできず再検証が必要と考えている。これは玉陵に限る話ではなく、後年屋根を乗せ誤る可能性についての検討が必要である。正に「墓は長い年月をあるがままに佇んできたわけではない（田名1989:308）」のだ。本来であれば実物資料でこれを検討するべきところだが、玉陵の資料を実見することはかなわないので、これも課題として指摘するにとどめる。そこで、本論では主に変化の方向性がすでに指摘されている屋根ではなく、かつ基本的に銘書が記される身の方に着目し型式の時間的推移の把握を試みる。

身正面意匠は彫刻区画が中央縦彫刻を帯状に残すものを身①系統と仮称する。この彫刻は玉陵では

基本長方形のデザインを正面に配置するが、長方形区画を陰刻するものと、区画線のみを線刻するものがある。さらに縦位区画の無い縁区画彫刻の身②系統と、縁の無い無文の身③系統がある（図1-⑩）。腰は、無段、有段の二種見られる。脚はタイプ i の角脚が相対的に古く、タイプ ii・iii が後続と想定した。正面に描かれる僧形図や文様、墨書記載箇所、側面の形状などにもバリエーションが認められ、各属性の特徴の異同から類別も可能である。

型式学的組列を考えると、①系統は1605年尚元王妃〔1〕→1620年浦添ようどれ〔2〕→1646年尚豊王〔3〕→1651年尚賢王〔4〕→1727年尚純王妃〔10〕の変遷が一つ年代とあわせ整合的と考える。これらはおおよそ17世紀に納まる。

他方、②系統は1526・1555年の尚真・尚清王〔6〕、1588年尚永王〔8〕の例がみられる。これらはいずれも①系統の資料より被葬者の死去年が古い。しかし、サイズはやや小さく、脚の形態は角脚ではないことから浦添ようどれの資料より後出と考えた。即ち、①系統と併存し1620年以降のある段階に登場すると解する文献史学との見解と型式学的な序列は整合的と推定した。③系統のものも同様に1599年尚元夫人〔9〕・1663年池城墓〔12〕がある。両者は年代的には前者→後者の先後関係も想定が可能であるものの、序列はそのままの可能性はあるが後者の年代に近い時期に製作されたと推定し、②系統同様に17世紀中頃に並行する可能性が高いと位置づけた。これは、高良が指摘する尚真、尚清王以下尚豊王までの石厨子銘書は1620年代から40年代のある時期に成立したとする指摘と調和的と考える。石厨子は死後速やかに用意されたものではなく、17世紀頃あるいは16世紀末に製作され、新たに調達された石厨子に被葬者の死後100年以上経て墨書記載したのではないかと仮定しておく。なお、この間はおそらく木製の厨子や棺に遺骨が納められており、それが石厨子の祖型になっていた可能性を筆者は考えている。この点で、輝緑岩製の石厨子を在地石材で模したといった単純なものではなく、木製の厨子あるいは棺など、様々な葬送に関する道具類の影響から入母屋の、輝緑岩製のものに比して相対的に彫刻のシンプルな石灰岩製石厨子の本論 1 a タイプが登場したと解した。輝緑岩からの系譜を全て排除するわけではないが、在地石材の石灰岩への形態的変化の飛躍には、もう少し別の、あるいは複雑な系統関係も想定しておきたい。

次に、〔15～27〕の身中央に3つ以上の穴を穿つ、もしくは左右にそれぞれ2つ以上の穴を穿つ多孔透かしのを 2 a とした。先行すると考えられる 1 式身①②③系統の基本デザイン 3 系統ごとにみていく。①系統のものは〔18・20・22・24・25・27〕などがある。②系統は先に紹介した玉陵東室の⑭⑯⑰〔15・16・17〕があり、これは1707・1709年洗骨年となる。特に〔15・16〕は同一洗骨年でほぼ同時に調達されたものとみられ大きさも総高約79cm、身幅約55cmとサイズも近い。1665・1701年の紀年銘となる〔19・21〕のナーチャー毛古墓群8号墓がある。③系統で透かしのあるものは、1700年玉陵西室⑱の〔23〕、1730年銘苅古墓群C6号墓の〔26〕がある。全体的に1650年から1750年の間に分布しており、1式と併存しながらも後出すると捉えた。

2 b は正面に1対（2孔）の透かしを穿つもので、①系統では〔28・29・30・32〕をあげることが

できる。②系統では1701年の紀年銘をもつ比嘉門中の〔31〕がある。2 bは、事例数としては多くないが、1式に後続し、後述する3式以降の基本的な透かし形状の範型となったと解釈した。

3式は赤色の帯状区画文を身正面等に描くもので、屋根形式は基本入母屋である。また、入母屋の大棟に鯨宝珠が乗るものと、乗らないものがある。本論では前者をa、後者をbとして屋根から二大別した。これに加えて、屋根軒を彫刻するものと彫刻しないタイプに分け、前者は1、後者は2を付して細分した。3式の特徴は、身正面は凹凸がなく平坦で、主に朱で格子状の装飾を施す点に特徴がある。ただし、バリエーションも豊富で、身正面は平坦で無彫刻が基本ながら、帯状朱線の縁を線彫するものや、帯状装飾を陽刻するものがある。この彫刻するタイプは2式の製作技法を継承するものと推定した。1666年玉陵東室⑩〔33〕、1680年大門森ANo26〔35〕、朱線はないが1688年県博収蔵資料〔36〕、線刻の1689年奥間ノロ墓〔37〕はいずれも彫刻を有する資料群である。特に先に紹介した、玉陵東室⑩尚賢王妃石厨子〔33〕は、大堀によってB1からC1の移行を繋ぐ型式とし透かし出現の画期となった資料として位置づけられている。本石厨子の被葬者が移葬されていることから、先に玉陵の系譜関係を理解するには留保し論じたが、その位置付けについてここで検討してみたい。

3式は2式と一部併存しながらも基本的には1・2式より後出するものと推定される。3式は大門森墓古墓群、ジョーミーチャー墓などうるま市、なかでも旧具志川市域で多く、数は少ないが宜野湾市や沖縄市でも見られる。先に述べたとおり、区画文に彫刻を施す一群はこの3式段階でもその初源期のものとして仮定した。事例は少ないながらも尚賢王妃石厨子〔33〕を除くと総じて1680年代に集中している。尚賢王妃石厨子〔33〕を3式系譜の最古式のものとして1666年を出現とする解釈も可能であるが、本系譜の出現年を考える上ではもう少し別の角度からも検討してみたい。

幸いにも、この尚賢王妃石厨子〔33〕には副葬品として鏡が相伴している〔34〕。鏡の年代観は写真からの判断ながら、17世紀半ば以前として位置付けるには厳しく、鏡面と柄の見かけ上の比率からして古くみて17世紀末～18世紀前半で、江戸時代後半までは下らないとされる^(註6)。検討はあくまでも実物資料の実見ではなく、写真からの評価であることを断りつつも被葬者が使った鏡とするには年代的に齟齬があると思われる。当該厨子被葬者がもともと玉陵に安置されていたものではなく、別の墓から移葬されたという経緯があり、かつ玉陵被葬者を納める厨子の中でも意匠として相違点が多い。なお、本被葬者は、父親の向氏越来按司朝則の一族墓が移葬前の墓地と比定されており、墓の所在地は不詳だが、越来按司とある（福地2008:34）。越来は現在の沖縄市で3式の主たる分布地域とほぼ整合的で興味深い。上記のような特異な厨子であることを踏まえ、いくつかの根拠から暫定的に3式の出現は年代については17世紀末～18世紀前半頃という鏡の年代観に依拠して位置づけ、3式初期の他の紀年銘資料とも年代的に近しいと捉えた。

次に（3式初期資料を除く）3式には1式、2式にはみられなかった屋根B形式と鯨宝珠が大棟に付される資料が登場する。最初に鯨などの無い入母屋からみていく。〔38～44〕はA形式大棟飾に鯨の無い資料群で3aとなる。〔41〕が3a1となる他は、本論で紀年銘があるということでピックアップ



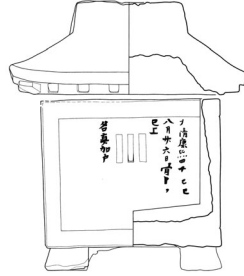
図4 石厨子1 (図:S=1/20, 写真:任意)



17 玉陵東室①尚純王
康熙48(1709)洗骨 2 a



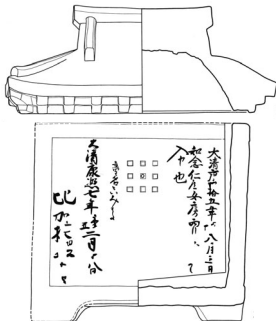
18 項氏 ①
隆武6(1650)不詳 2 a



19 ナチ1-毛8号 3
康熙4(1665)洗骨 2 a



20 県博 (上江洲2)
康熙5(1666)不詳 2 a



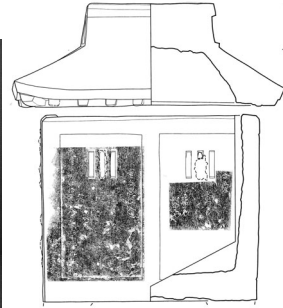
21 ナチ1-毛8号 2
康熙15(1676)洗骨 2 a



22 大山上江家 19
康熙38(1699)死去 2 a



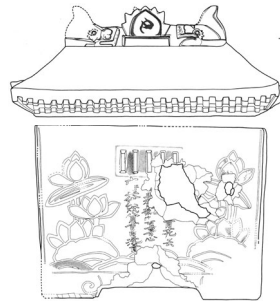
23 玉陵西室⑤尚恭夫人雪嶺
康熙39(1700)死去 2 a



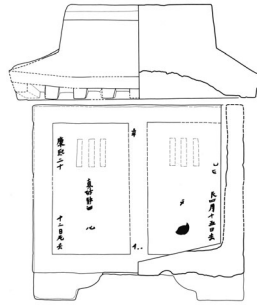
24 ナチ1-毛8号 1
康熙40(1701)洗骨 2 a



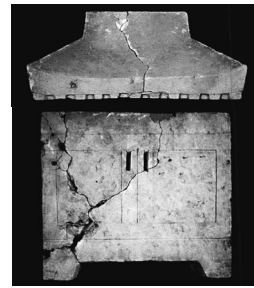
25 県博 (上江洲3)
康熙50(1711)不詳 2 a



26 銘苺(2)C6
雍正8(1730)洗骨 2 a



27 銘苺(1)B16
乾隆1(1736)死去 2 a



28 奥間ノ口 3
康熙16(1677)不詳 2 b



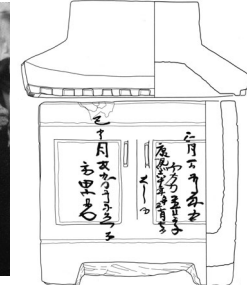
29 玉陵東室⑤ 尚貞王
康熙48(1709)死去 2 b



30 比嘉門中1号 18
康熙40(1701)不詳 2 b



31 比嘉門中1号 19
康熙40(1701)不詳 2 b



32 城間東空壽4号 21
康熙60(1721)不詳 2 b

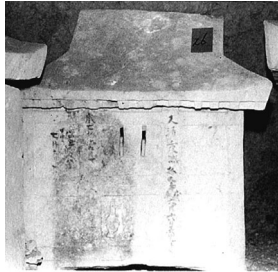
図5 石厨子2 (図：S=1/20, 写真：任意)



33 玉陵東室⑫尚賢王妃花園
康熙5(1666)死去 3a1



34 鏡
(同左石厨子内)



35 大門森A 26
康熙19(1680)洗骨 3a1



36 泉博(上江洲1)
康熙27(1688)死去 3a1



37 奥間ノ口 5
康熙28(1689)不詳 3a1



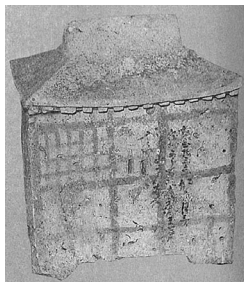
38 大門森A 20
康熙33(1694)不詳 3a2



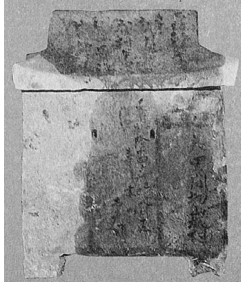
39 大門森A 23
康熙45(1706)洗骨 3a2



40 下仲宗根 16
康熙61(1722)死去 3a2



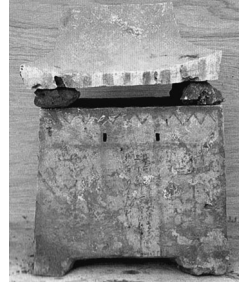
41 伊波焼墓 22
雍正13(1735)不詳 3a1



42 伊波焼 37
乾隆14(1749)洗骨 3a2



43 泉博(上江洲6)
乾隆23(1758)洗骨 3a2



44 ジョーミチャー 100
嘉慶3(1798)洗骨 3a2



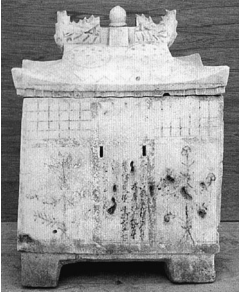
45 壺屋焼博 98
康熙(1662-1722)不詳 3a1



46 壺屋焼博 110
康熙33(1694)不詳 3b1

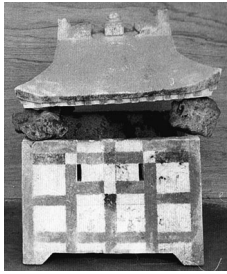


47 大門森B 54
康熙49(1710)死去 3b1



48 ジョーミチャー 74
雍正15(1737)洗骨 3b1

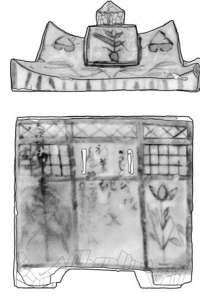
図6 石厨子3 (S=任意)



49 ジョーミチャー 117
乾隆14(1749)不詳 3b1



50 大門森A 24
乾隆31(1766)死去 3b2



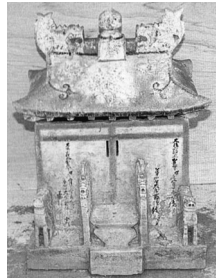
51 野嵩桃原 9
乾隆 (1736-1795)不詳 3b2



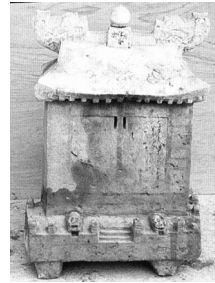
52 大門森B 35
嘉慶10年代(1807-14)洗骨? 3b1



53 大門森C 23
康熙 (1662-1722)不詳 3-4



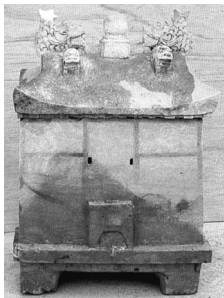
54 ジョーミチャー 103
雍正2(1724)洗骨 3-4



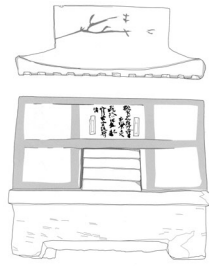
55 ジョーミチャー 98
雍正11(1733)洗骨 3-4



56 大門森B 36
乾隆3(1738)死去 3-4



57 ジョーミチャー 105
乾隆9(1744)洗骨 3-4



58 野嵩上後原34号 7
乾隆14(1749)洗骨 3-4



59 ジョーミチャー 101
乾隆24(1759)不詳 3-4



60 壺屋焼博 95
乾隆24(1759)不詳 3-4



61 県博 (県博2008)
雍正6 (1728)洗骨 3-4



62 伊波焼 75
康熙53(1714)移葬? 4 b



63 野嵩桃原家 8
乾隆28(1763)不詳 4 a



64 野嵩桃原家 5
乾隆28(1763)不詳 4 a

図7 石厨子4 (図：S=1/20, 写真：任意)



図8 石厨子5 (図: S=1/20, 写真: 任意)

した図示資料はいずれも3a2となる。年代的には17世紀末～18世紀の紀年銘が墨書されている。

〔46～52〕は大棟に宝珠鯨の資料群で3bに分類される。3b2に分類される〔51〕は、軒彫刻を略し彩色される資料で図示資料では1例で、他はいずれも軒を彫刻する3b1となる。

3式にはA形式単層のもののほか、屋根が二層のB形式が存在している。〔45〕の壺屋焼物博物館所蔵資料は康熙〈年不詳〉年戊午と判読されている。干支から1678年と類推した。ただし、本厨子は他に判読不明の文字が多いため不明とした文字に年号が含まれる可能性があり年代はやや下降する可能性がある。資料の区画文や均整のとれた器形から3式の中でも古い要素が多く、3式古段階のものとして位置づけられるものと考えた。

3式における変化の方向性としては、総じて朱描きの区画帯が彫刻される初期段階、幅広の区画帯の古段階がある。後者は、銘書が空白内に墨書、長文で記載されるものが多く、屋根に文様が施されるものもあるものの、正面に蓮華文などは描かれることは少ない。一方、蓮華文や格子の窓を朱描きなどで施文するものは、康熙年の古い資料もあるが、雍正、乾隆、嘉慶年間で確認されている。加えて次に紹介する4式に盛行する要素となることから、相対的に3式でも新相になると想定し、3式新段階と仮称する。

〔53～61〕は3式の区画を持つ資料に龍柱・香炉・階段などが彫刻される資料で、3-4式^(註7)とした。これは、3式と4式の過渡の様相で、今回は3式と4式のいずれかに特定させずに、属性共伴例として1型式とした。これらの資料群は、年代的には3式に並行すると考えている。これも、3式同様古段階と新段階の資料に分けられる。紀年銘がみられるものでは〔53〕の大門森CNo23の康熙年の墨書資料が古く、〔60〕の乾隆24年（1759）を記すものが最も新しい。いずれも鯨が乗る屋根形式となる。龍柱が付されるものは、首里城正殿の影響と考えられている（沖縄県立博物館・美術館2008:58）。龍柱は、年代の古いものは細身の龍柱で、次第に太く短く、龍もかま首をもたげるものから、これがほとんどないものへと変化し、おおよそ造りが粗くなっていく。周辺の装飾の組み合わせに目を向けると、龍柱に香炉+獅子⇒香炉+銘書面+獅子⇒階段+獅子のデザインの変遷も読み取ることができる（宮城2021c）。なお、〔61〕は二層屋根のB形式となる。

〔62～76〕は4式である。4式は区画文が無く、身正面に彫刻意匠を施すものである。特に立体的で人物像等を陽刻するものをaとし、腰部もしくは腰部下部の幅にやや厚みを持たせ仕上げる程度で全体的に平坦となるbに大別する。

〔63～70〕は4aに分類する。3-4式にみられる区画が無いのに加え、特徴的な龍柱の装飾も無くなり、正面に陽刻されるのは合掌する僧形へ変わる。

〔62・71～74〕は4bで、〔62〕がやや古い紀年銘をもつものの年代分布としては図2で示すとおり18世紀後半から19世紀初頭に分布の偏りがある。なお、〔71〕のように身正面にほぼ凹凸の無い一群があるが、区画文を持たないことから4式に分類した。

4式にも二層屋根のB形式が存在する。屋根形式は〔75〕の二層屋根以外にも、〔76〕の陶製御殿

形で分類した重層屋根のものがある。特徴的な器形の〔76〕も鯨がデフォルメされ魚形は崩れ、二層屋根で瓦意匠が施されながらも、入母屋屋根であり、透かしがあるなどの点から4式に位置づけた。

5式は、〔77・78〕のように正面に僧形が陽刻される縦長の身に、B形式の二層屋根が乗るタイプである。前出の4式よりも身正面全体に彩色され装飾過多となる。陶製御殿形のⅢ・Ⅳ式に見るような身に付された庇が彫刻される。陶製の御殿形厨子は、その初期こそ石厨子を模し作られたものと考えられるが、少なくとも5式に見られる意匠は、逆に陶製御殿形厨子から石厨子に影響を与えたものと推測される。

最後に若干5式に関して課題点を記しておきたい。5式は上記二層屋根のみと理解するか、単層のものがあるのかは資料数が乏しく結論を出し難いが、本論ではやや断定的に記した。ここは、今後の資料数の増加を待って柔軟に対応したい。あくまでも仮に、透かし孔がないことを特徴と捉え、単層系の屋根として〔79・80〕が5式に該当するのではないかと仮定する。ただし、〔79〕の紀年銘は1750年と古くなり整合的ではない部分もある。また、〔81〕は銘書があるものの年号の記載はないが、彫刻表現は先に紹介した〔79・80〕に比して単純ながら、波状文や多色であることなどは5式と調和的である。単層の5'は図2で示すとおり二層のタイプとは年代分布が離れており、1式の無孔の資料の新しい方の外れ値と時間的には並行している。透かし孔が無いというので本論では分類したが、彫刻区画帯の無いこれらのグループの位置づけについてはあくまでも暫定的な分類と位置付けとしておく。なお、朱により図像等が描かれるが、彩度の高い鮮やかな赤と、やや低くにぶい赤がある。概して3式は後者で、前者は4式でも比較的新しい段階に見られる。以前筆者らが行った分析ではにぶい赤は鉄が検出されることからベンガラが用いられたと推定され、鮮やかな赤は水銀朱を検知することができた。4・5式には他に緑色や青色の顔料で描かれる資料が知られている(宮城ほか2012)。文様や顔料の年代的推移についても分析分野の研究と提携しながら実証的な研究を行うことが望まれる。

②屋根形態の時間的変遷

分析資料134点中蓋の無い3点を除き、屋根形式について確認していく(図9)。屋根は、入母屋(棟飾り無し、宝珠鯨棟)、起り屋根、寄棟(棟飾り無し、宝珠鯨棟)に分類される(図1-⑦)。1・2式は基本入母屋で占められる。3式は入母屋が主体だが、入母屋に宝珠鯨棟となるもの、二層屋根のB形式が登場する。4式は、大棟が無装飾の入母屋は大きく数を減じ、入母屋や寄棟に宝珠鯨棟となるものと寄棟で占められる。概して寄棟化すると言える。5式は保留した5'を除き二層屋根で占められる。

また、これを記載される基準年を50年ごとに区切って、図10に示した。先にその年代について型式との齟齬を指摘したものも含むが、1650年以前は基本入母屋である。1650年～1750年の間に起り屋根が登場するも1750年以降は存在しない。寄棟は1800年代前半に入母屋にとって代わるようにその占有率を増やし、入母屋に宝珠鯨棟となるものは1600年代の終わりに出現し1750年以降その主体となっ

ている。なお、二層屋根は1600年終わり以降少数ながら見られるものの、1850年以降はその形を変化させつつ、これで占められるようになる。ただし、本分析に用いる各型式の資料数には多寡があり、かつ紀年銘資料に限られたものであるためおおよその傾向と理解いただきたい。

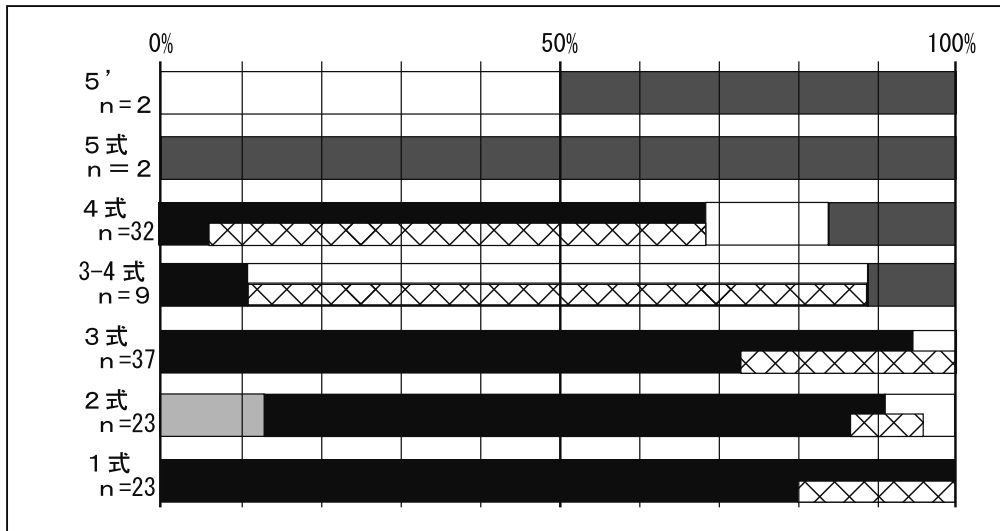


図9 各型式に占める屋根形態

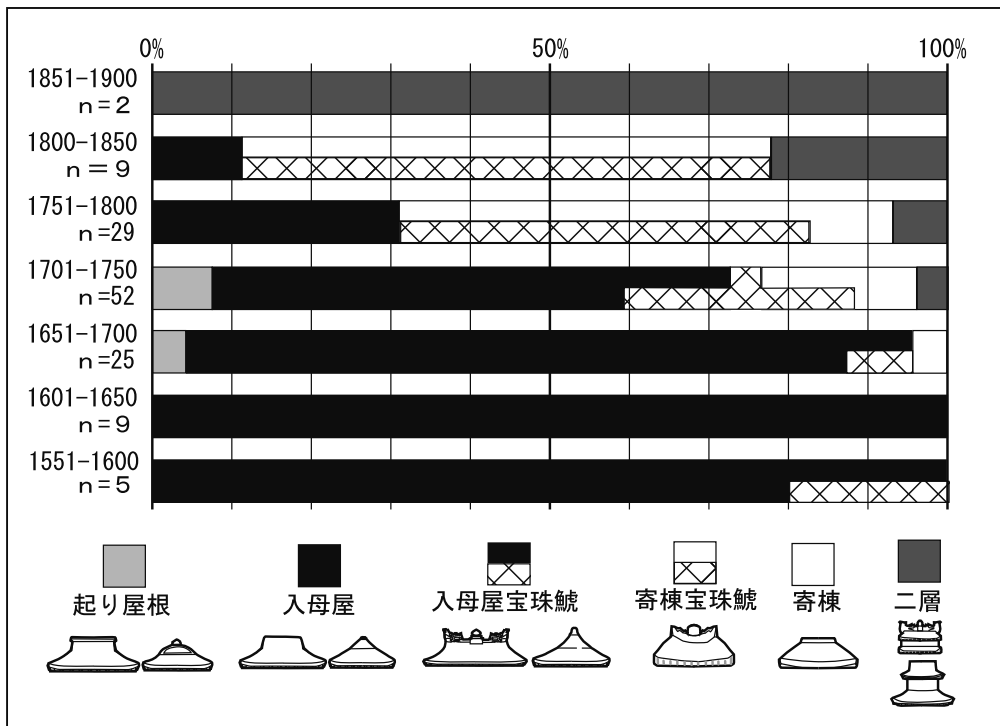


図10 50年ごとの屋根形態

8. 各型式の分布地域と需要層について

石厨子の地域性について確認する(図11)。型式の主たる年代分布とともに、各型式の出土遺跡の分布についても確認する。地域による変化の実態についても上江洲によって「石材の豊富な地域とそうでない地域(中略)後にはかなり壺屋の製品が普及し、他を圧倒する(上江洲1980:344)」として、既に重要な指摘がなされている。その材の調達と壺屋焼の普及が、分布地域を考える上で重要な要素となる。

対象資料は発掘調査等出土地点のはっきりした事例で、既報告・掲載資料とし紀年銘の有無に限らずに2021年に集成した資料(宮城2021a)を用いた。なお、上記の分析方法以外にも、所在遺跡が不明の博物館等収蔵資料に対し、銘書に記される村名などからも同様の分析が可能と考える。しかし、本論では遺跡出土例を用いた予備的な考察を行い、数的な傾向や銘書を用いた検討については今後の課題としておく。

1式は基本玉陵、浦添ようどれで確認されている。特に1aはこの2遺跡に限られる。1式はほかに、銘苅古墓群(那覇市)、項氏砂辺家の墓(那覇市)、摩文仁家の墓(南風原)、池城墓(今帰仁村)などの事例が確認されており、摩文仁家の墓は王族家に繋がる墓所で、池城墓には「崎山大やくもい」の被葬者名が記され、項氏砂辺家は士族層であることから、階層上位の身分で用いられていると評価できると考える。

2式是那覇市域、浦添、宜野湾、西原などで出土例が確認される。これらの多くも同様に階層上位層で用いられたものと推測される。ただし、2式で銘書のある資料で、浦添市伊祖から出土したとされる沖縄県立博物館収蔵資料〔25〕は伊波筑登之親雲上の銘が刻まれている(沖縄県教育委員会1980:118)。筑登之家はいわゆる下級士族になり、この段階では士族層全体に石厨子が普及していたと推定される。

3式是那覇、浦添、西原などでの出土例が僅かながら確認されるものの、1つの墓に本型式が多く確認されるのは、うるま市域である。特にうるま市の大門森古墓群(具志川)、ジョーミーチャー墓(具志川)、伊波焼墓(石川)ではこのタイプの石厨子が多数含まれている。

3-4式もおおよそ3式と同様であるが、那覇市、浦添市

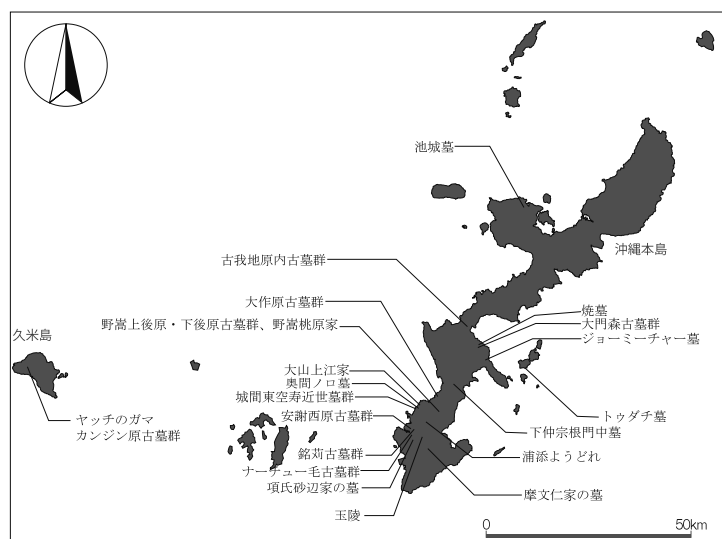


図11 出土遺跡位置図

域の調査では管見の限りこのタイプの事例は確認できなかった。本資料も大門森古墓群、ジョーミーチャー墓、伊波焼墓で多くみられる。

4式は、3式及び3-4式に重複しうるま市域に多くみられ古我地原内古墓（石川）、平安座トゥダチ墓（与那城）にその数が多い。他にも、数は多くないが、野嵩桃原家古墓（宜野湾市）、大作原古墓群（北谷町）でも報告例がある。

5式については数も少ない上、遺跡からの発見例に乏しい。本論で紹介した2例はいずれも博物館収蔵資料である。〔78〕の収集地が北中城と記録されており（上江洲1981:122）、また銘書も萩道村の村名記載がある。なお、先に引用した上江洲均が記録する古老の聞き取りも北中城村渡口の話である（上江洲1980:357）。以下は推定の域を出ないが、昭和はじめの型式はこの5式と推定され、上記銘書に記載された北中城であることもこれを支持すると推定する^{（註8）}。

9. おわりに

石厨子は素材の石が共通することから、輝緑岩製石厨子を祖型とし在地化した型式変化と捉えられている（大堀2019:64）。しかし、本論では墨書銘書が後に記載された可能性を型式学的考察からも可能であることを指摘し、古式とした資料群も17世紀代に登場したと解した。これが支持されるなら、空白となる約100年の蔵骨器がなんであるか、あるいはその出現の契機について別の解釈を用意すべきではないかと考えている。

上原静は石灰岩のものを日本様として、屋根形状、垂木表現などから石灰岩石厨子が日本建築の様式美を指摘する。具体的には、日本の石塔や宝塔の製作技術様式との近似性について言及している（上原2017）。

水谷類は全国的なラントウ（石塔）を分析する中で、沖縄の石厨子との形態的類似性を指摘（水谷2009:98）しており、この指摘も興味深い。

本論は石厨子の型式変化についての論じることを目的としており、具体的にその祖型に関する考察についての詳細な分析は行っておらず、ここでは予察の域にとどまる。しかしその屋根の形状は木製の厨子の屋根に類似点を見る。また、同様に木造のもので、伝世する龕にも類似点が多い。初期は別にして、後出となる3-4式・4式・5式に見られる二層屋根や彫刻についてはいかにも首里城を模したもので、これも上原によって指摘されたとおりである（上原2017:299）。石厨子の特に最初期の資料群の祖型についての課題が多く、これについては今後別に検討したい。

以上、石灰岩石厨子の細分編年を目指し、紀年銘資料から統計的に年代が集まるところを製作が集中した時代として年代比定を行った。略して各型式の特徴を示すなら、1・2式が正面横断面凹型（前者が無孔、後者が多孔から2孔対）、3式が平坦（で記号にすると「□」）型（2孔対）、4・5式が凸型（前者が1略孔透かし、後者が無孔）に分類し、石厨子の経時的変化について考古学的手法によって初歩的な考察を行った。銘書の集成、陶製御殿形の編年からはじまり、本論で石厨子の分類案

と年代比定を行い、御殿形厨子の一群については考古学的分析の基礎となる編年について多少整理ができたものと考えている。言うまでもなく、ほぼ紀年銘資料に限るため本稿には不備も多いと思う。現場での経験豊富な諸先輩方のご鞭撻賜り不備は適宜改めたい。

本論は、下記科学研究費の助成を受けた。また、研究会ならびに、沖縄考古学会定例研究会で口頭発表したものを加筆修正したもので、執筆にあたり次の方々から、多くご教示頂きまとめることができました。

以下、記して感謝申し上げます。

Alexandra Garrigue、阿利よし乃、天久朝海、安和吉則、上原静、大堀皓平、具志堅清大、国吉康孝、久保智康、倉成多郎、小橋川剛、佐伯信之、佐川正敏、鈴木悠、砂川正幸、関根達人、瀬戸哲也、玉城靖、土岐耕司、長濱健起、仁王浩司、萩尾俊章、又吉幸嗣（五十音順敬称略）

付記：本稿は「葬墓制資料に基づく近世琉球社会史の学際的研究」（基盤研究B、課題番号21H00604、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部である。

<註釈>

註1. 上江洲編年は石製厨子を①閃緑岩（以下輝緑岩として統一）、②石灰岩、③凝灰岩、④サンゴ石灰岩製石厨子に分類する。本論では②、④を対象とする。

註2. うるま市江洲按司・ノロの墓は2020年にうるま市教育委員会によって墓室内の調査が行われている。筆者は同調査を拝見させていただく機会をいただき、墓室内に石製の宝形造厨子があるのを確認することができた。調査担当の国吉康孝氏案内いただいた。（2020年3月18日国吉私信）

註3. 掲載された図の「尚泰¹⁹（洗1920）」の図が石厨子になっているが、これは筆者挿図に誤りがあったためである。記して訂正する。

註4. C2（石厨子）⇒C3（陶製）の変化については、筆者は単純に石厨子からの変化、これの写しではないのではないと考える。既に陶製御殿形厨子は壺屋などで製作されていたことがわかっている。玉陵の石厨子は伝統的に鯨が付されていない。玉陵の陶製の資料から鯨が付されるが、既に壺屋の陶製では本鯨の乗る屋根のデザインが存在しており、石厨子が単純に写されたとするよりも、陶製御殿形厨子の中の変遷と理解するべきと考えている（宮城2020b）。

註5. 国王厨子全てに透かしがあるというわけではない点も気になる。透かしが無いという現象は、つまるところ玉陵の中の現象で、国王厨子の一つの属性としての特徴である可能性もまた排除するべきではない。

註6. 久保智康氏に年代観について以下のようにご教示いただいた。「本資料については、17世紀半ば以前というのは厳しく、法量が正確にわからないものの、鏡面と柄の見かけ上の比率からして古

くみて17世紀末～18世紀前半で、下り藤紋の中の砂目地が見えており、あまり規則的、まばらではなく、密に施刻してしており、このような特徴から江戸時代後半までは下らない。」（2021年8月3日久保私信）

註7．彫刻された装飾から型式のナンバリングを4式とするべきとも考えたが、並行関係は3式にあることから、これを留保した。必ずしも適切なナンバリングではないとも考えるが、3式と4式の特徴を併せ持つ資料として、3-4式で呼称し紹介していく。

註8．北中城村の資料については、萩尾俊章氏、小橋川剛氏に過去に調査、立ち合いされた調査写真を閲覧させていただき、本資料群について特に5式を考える上で重要なご指摘をいただいた。具体的には戦後の記載例のある石厨子や、5式段階と思われる資料群ながらも透かしがある資料を確認することができた。残念ながら資料の多くは教育委員会に収蔵されていない資料で個人蔵のため、実見することができていないため、ここに記して本論を補い、5式の課題点として資料を追加し修正していきたい。

《参考文献》

- 安里 進2006「伊是名玉陵の考古学的調査」『首里城研究』No.6 首里城研究会pp. 30-46
- 上江洲均1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書pp. 341-374
- 上江洲均1981「沖縄の厨子甕」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査等—西日本—』日本常民文化研究所報告第8集pp. 109-148
- 上原 静2000「輝緑岩製石棺にみる屋根瓦」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会 pp. 315-342
- 上原 静2017「琉球列島における厨子の造形文化と葬墓制(1)-厨子の起源-」『南島考古』No. 36 沖縄考古学会pp. 291-302
- 浦添市教育委員会2006『比嘉門中の墓—家族の数だけ歴史がある—比嘉門中墓の調査概要—』浦添市文化財調査研究報告書
- 浦添市教育委員会2017『城間東空寿古墓群—県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』浦添市文化財調査研究報告書
- 大堀皓平2013「近世から出土する石製品」『琉球近世墓の考古学—発表報告編—』沖縄考古学会pp. 50-56
- 大堀皓平2016「沖縄県内に出土する石厨子の分類と編年試案」『よのつち（浦添市文化部紀要）』第12号 浦添市教育委員会pp. 31-40
- 大堀皓平2019「玉陵における石厨子の型式学的変遷」『首里城研究』No. 21 首里城研究会pp. 58-67
- 大湾ゆかり2018「那覇市の古墓調査2—項氏の墓の内部構造—」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第11

号pp. 135-142

沖縄県教育委員会(編)1980『金石文—歴史資料調査報告書V—』沖縄県文化財調査報告書第68集

沖縄県教育委員会(編)1987『石川市古我地原内古墓』沖縄県文化財調査報告書第85集

沖縄県地域史協議会(編)1989『南島の墓 シンポジウム—沖縄の葬制・墓制—』沖縄出版

沖縄県立博物館・美術館2008『ずしがめの世界』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『ヤッチのガマ カンジン原古墓群—県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集

沖縄市教育委員会1985『下仲宗根門中の墓』沖縄市文化財調査報告書第6集

宜野湾市教育委員会2011『市内埋蔵文化財発掘調査報告書2—基地内遺跡ほか発掘調査事業—』宜野湾市文化財調査報告書第47集

宜野湾市教育委員会1996a『奥間ノロ墓 図録編—一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書—』宜野湾市文化財調査報告書第24集

宜野湾市教育委員会1996b『奥間ノロ墓 図録編解説—一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書—』宜野湾市文化財調査報告書第24集

宜野湾市教育委員会2017a『市内埋蔵文化財3—基地内遺跡ほか発掘調査事業—』宜野湾市文化財調査報告書第53集

宜野湾市教育委員会2017b『野嵩上後原古墓群—野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』宜野湾市文化財調査報告書第54集

金武正紀2007「考古学から見た銘苺古墓群」『銘苺古墓群』那覇市文化財調査報告書第72集 那覇市教育委員会pp. 45-79

具志川市教育委員会1993『大門森古墓群(銘苺門中墓)調査概報』具志川市の文化財 第3集

具志川市教育委員会2003『ジョー(門)ミーチャー墓調査概報』具志川市の文化財第5集

高良倉吉1984年「玉陵の石厨子銘書について」『沖縄史料編集所紀要』第9号 沖縄史料編集所pp. 72-104 (1989『琉球王国史の課題』ひるぎ社:再録)

田名真之1989「墓—歴史的視点から見た諸相」『新琉球史—近世編(上)』琉球新報社pp. 280-308

玉陵復原修理委員会1977『重要文化財 玉陵復原修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会

名嘉真宜勝1992「石川市伊波焼墓調査報告」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第16号 読谷村立歴史民俗資料館pp. 61-116

那覇市教育委員会1998『銘苺古墓群(I)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第39集

那覇市教育委員会 1999『銘苺古墓群(II)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第40集

- 那覇市教育委員会2001『安謝西原古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』
那覇市文化財調査報告第51集
- 那覇市教育委員会2000『ナーチャー毛古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告
VII－』那覇市文化財調査報告書第44集
- 那覇市立壺屋焼物博物館2015『沖縄宗教藝術の精華 厨子－門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念
報告書－』
- 那覇市市民文化部2005『玉陵』新星出版
- 日本民藝館2020『祈りの造形 日本民藝館・厨子甕』
- 福地有希2008「首里玉御殿の存在意義に関する一考察～『王代記』に見る被葬者認識の変遷を手掛かり
にして～」『首里城研究』No. 10 首里城研究会pp. 32-46
- 水谷 類2009『廟墓ラントウと現生浄土の思想－中近世移行期の墓制と祖先祭祀－』雄山閣
- 宮城弘樹2019「御殿形厨子の研究（1）－紀年銘資料を中心として－」『南島考古』第38号 沖縄考
古学会pp1-20
- 宮城弘樹2020a「御殿形厨子の研究（2）－赤焼・荒焼御殿形厨子の編年－」『南島考古』第39号 沖
縄考古学会pp115-126
- 宮城弘樹2020b「御殿形厨子の研究（3）－上焼御殿形厨子の編年－」『総合学術研究紀要』第22巻第
1号 沖縄国際大学総合学術会議pp. 23-39
- 宮城弘樹2020c「沖縄の葬墓制史と平安座島トゥダチ墓の石厨子(前)」『月刊石材』2020年7月号 石
文社 pp. 50-57
- 宮城弘樹2020d「沖縄の葬墓制史と平安座島トゥダチ墓の石厨子(後)」『月刊石材』2020年8月号 石
文社 pp. 50-57
- 宮城弘樹(編)2021a『琉球葬墓制資料集成（1）－厨子（蔵骨器）編－』沖縄国際大学考古学研究室
- 宮城弘樹(編)2021b『琉球葬墓制資料集成（2）－銘書編－』沖縄国際大学考古学研究室
- 宮城弘樹2021c「あの世の正殿に立つ龍柱～近世琉球の人びとの首里城イメージ～」『首里城学術ネッ
トワークショップ2021』（ポスター発表2021年）
- 宮城弘樹2021d「御殿形厨子の研究(4)－陶製御殿形厨子の底孔に着目して－」『壺屋焼物博物館紀要』
第22号 那覇市立壺屋焼物博物館pp. 1-10
- 宮城弘樹・ほか2012「石厨子の彩色顔料」『首里城研究』No. 14 首里城研究会pp. 27-38

付表 掲載資料一覧

掲載No	遺跡名	墓番号	蔵器No./ 図番号	基準紀年銘 (文書記録等)	西暦	洗骨 死去	記載	材質	形式	型式	屋根	備考	報告 書No	研究 (1)	資料 集(2)	
1	玉陵	東室	4/257	万曆	33	1605	死	墨	石	A	1a	入	尚元王妃 梅岳	20	—	1843
2	浦添ようどれ	尚寧陵	10/p130	万曆	48	1620	死	刻	石	A	1a	入		146	7	4407
3	玉陵	東室	7/260	弘光	2	1646	洗	墨	石	A	1a	入	尚豊	20	11	1846
4	玉陵	東室	11/264	隆武	7	1651	洗	墨	石	A	1b	入	尚賢	20	13	1849
5	玉陵	東室	19/272	雍正	1	1723	洗	墨	石	A	1b	入	尚益	20	—	1857
6	玉陵	東室	2/255	嘉靖	44	1555	死	墨	石	A	1b	入	尚真・尚清	20	—	1841
7	玉陵	東室	3/256	隆慶	6	1572	死	墨	石	A	1b	入	尚元	20	—	1842
8	玉陵	東室	5/258	万曆	16	1588	死	墨	石	A	1b	入	尚永・阿心理屋按 司加那志	20	—	1844
9	玉陵	西室	6/282	万曆	27	1599	死	刻	石	A	1b	入	尚元夫人 雪嶺 (1945年移葬か)	20	6	1880
10	玉陵	東室	18/271	雍正	5	1727	洗	刻	石	A	1b	起	尚純王妃 義雲	20	—	1856
11	日本民藝館	館藏品	/p2, 3	天啓	5	1625	死	刻	石	A	1b	入		144	9	4384
12	池城	—	—	寛文	3	1663	不	刻	サ?	A	1b	入		147	14	4417
13	安謝西原(2)	37	3/28図1, 2	康熙	59	1720	洗	墨	石?	A	1b	寄		9	56	1209
14	日本民藝館	館藏品	/p4	雍正	2	1724	洗	墨	サ	A	1b	入		144	—	4385
15	玉陵	東室	14/267	康熙	46	1707	洗	墨	石	A	2a	入	尚賢王妃 栢窓	20	49	1852
16	玉陵	東室	16/269	康熙	46	1707	洗	墨	石	A	2a	入	尚貞王妃 月心	20	50	1854
17	玉陵	東室	17/270	康熙	48	1709	洗	墨	石	A	2a	起	尚純	20	—	1855
18	項氏	墓A	①/	隆武	6	1650	不	刻	サ	A	2a	入		大湾 2018	12	—
19	ナチュモ	8	3/33図3, 4	康熙	4	1665	洗	墨	不	A	2a	入		13	17	1713
20	沖縄県博	館藏品	上江洲2	康熙	5	1666	不	刻	サ	A	2a	入		142	59	4173
21	ナチュモ	8	2/32図1, 2	康熙	15	1676	洗	墨	不	A	2a	入		13	23	1712
22	大山上江家	—	19/Ⅲ-9図19	康熙	38	1699	死	墨	サ	A	2a	入		81	36	3389
23	玉陵	西室	15/287	康熙	39	1700	死	墨	石	A	2a	入	尚恭夫人 雪嶺	20	37	1886
24	ナチュモ	8	1/33図1, 2	康熙	40	1701	洗	刻	不	A	2a	入		13	43	1711
25	沖縄県博	館藏品	上江洲3	康熙	50	1711	不	刻	サ	A	2a	入		142	31	4174
26	銘苺(2)	C6	/44図1, 2	雍正	8	1730	洗	刻	石?	A	2a	寄	純	2	66	669
27	銘苺(1)	B16	/67図1, 2	乾隆	1	1736	死	墨	石	A	2a	起		1	28	1
28	奥間ノ口	—	3/PL78	康熙	16	1677	不	墨	サ	A	2b	入		84	—	3400
29	玉陵	東室	15/268	康熙	48	1709	死去	刻	石	A	2b	起	尚貞	20	—	1853
30	比嘉門中	1	18/図版18	康熙	40	1701	不	墨	サ	A	2b	入	明治に後書き有	56	40	3079
31	比嘉門中	1	19/図版18	康熙	40	1701	不	墨	サ	A	2b	入		56	41	3080
32	城間東空寿	4	21/23図 63, 64	康熙	60	1721	不	墨	サ	A	2b	入		66	—	3176
33	玉陵	東室	12/265	康熙	5	1666	死	墨	サ?	A	3a1	入	尚賢王妃 花園(乾 隆16年移葬)	20	18	1850
35	大門森	A	26/p13	康熙	19	1680	洗	墨	サ	A	3a1	入		106	25	3818
36	沖縄県博	館藏品	上江洲1	康熙	27	1688	死	刻	サ	A	3a1	入		142	26	4172
37	奥間ノ口	—	5/PL80	康熙	28	1689	不	墨	サ	A	3a1	入		84	—	3402
38	大門森	A	20/p11	康熙	33	1694	不	墨	サ	A	3a2	入		106	32	3813
39	大門森	A	23/p11	康熙	45	1706	洗	墨	サ	A	3a2	入		106	46	3816
40	下仲宗根門中	—	16/p53	康熙	61	1722	死	墨	サ	A	3a2	入		102	58	3803
41	伊波焼	—	22/	雍正	13	1735	不	墨	サ	A	3a1	入		109	—	3896
42	伊波焼	—	37/	乾隆	14	1749	洗	墨	サ	A	3a2	入		109	76	3898
43	沖縄県博	館藏品	上江洲6	乾隆	23	1758	洗	墨	サ	A	3a2	入		142	83	4177
44	ジョーミチャー	—	100/p98	嘉慶	3	1798	洗	墨	サ?	A	3a2	入		110	98	3967
45	壺屋焼博	館藏品	98/p15, 16	康熙	不詳	1662~ 1722	不	墨	サ	B	3a2	入	戊午=1678か	143	60	4260
46	壺屋焼博	館藏品	110/p20, 21	康熙	33	1694	不	墨	サ	A	3b1	入	純	143	34	4261
47	大門森	B	54/p43	康熙	49	1710	死	墨	サ	A	3b1	入	純	106	53	3842
48	ジョーミチャー	—	74/p78	雍正	15	1737	洗	墨	サ?	A	3b1	入	純	110	62	3959
49	ジョーミチャー	—	117/p113	乾隆	14	1749	不	墨	サ?	A	3b1	入	純	110	—	3974
50	大門森	A	24/p11	乾隆	31	1766	死	墨	サ	A	3b2	入	純	106	89	3817
51	野高桃原家	—	9/V-8図16	乾隆	不詳	1736~ 1795	不	墨	サ	A	3b2	寄	純	81	—	3398
52	大門森	B	35/p36	嘉慶	10年代	1805~ 14	洗?	墨	サ	A	3b1	純		106	102	3833
53	大門森	C	23/p62	康熙	不詳	1662~ 1722	不	墨	サ	A	3-4	入	純	106	—	3855
54	ジョーミチャー	—	103/p102	雍正	2	1724	洗	墨	サ?	A	3-4	寄	純	110	61	3970

付表 掲載資料一覧

掲載No	遺跡名	墓番号	蔵骨器No./ 図等番号	基準紀年銘 (文書記録等)	西暦	洗骨 死去	記載	材質	形式	型式	屋根	備考	報告 書No	研究 (1)	資料 集(2)
55	ゾーミチヤ	—	98/p97	雍正 11	1733	洗	墨	サ?	A	3-4	入		110	67	3966
56	大門森	B	36/p36	乾隆 3	1738	死	墨	サ	A	3-4	鯪		106	70	3834
57	ゾーミチヤ	—	105/p104	乾隆 9	1744	洗	墨	サ?	A	3-4	寄		110	72	3972
58	野嵩上後原	34	7/III16図-7	乾隆 14	1749	洗	墨	サ	A	3-4	入	乾隆?	87	—	3467
59	ゾーミチヤ	—	101/p99	乾隆 24	1759	不	墨	サ?	A	3-4	寄		110	84	3968
60	壺屋焼博	館蔵品	95/p21, 22	乾隆 24	1759	不	墨	サ	A	3-4	寄		143	85	4263
61	沖縄県博		/p29写真5-12	雍正 6	1728	不	墨	サ	B	3-4	入		県博 2008	—	—
62	伊波焼	—	75/	康熙 53	1714	移?	墨	サ	A	4b	寄		109	54	3910
63	野嵩桃原家	—	8/V-7図15	乾隆 28	1763	不	墨	サ	A	4a	寄		81	87	3397
64	野嵩桃原家	—	5/V-4図12	乾隆 28	1763	不	墨	サ	A	4a	寄		81	88	3395
65	野嵩桃原家	—	6/V-5図13	乾隆 41	1776	死	墨	サ	A	4a	寄		81	91	3396
66	沖縄県博	館蔵品	上江洲13	乾隆 43	1778	洗	墨	サ	A	4a	寄		142	92	4184
67	沖縄県博	館蔵品	上江洲12	乾隆 57	1792	不	墨	サ	A	4a	入		142	94	4183
68	壺屋焼博	館蔵品	101/p27, 28	嘉慶 23	1818	不	墨	サ	A	4a	寄		143	100 101	4266
69	下仲宗根門中	—	5/p 35	道光 19	1839	洗	墨	サ	A	4a	寄		102	103	3794
70	壺屋焼博	館蔵品	96/p25, 26	道光 19	1839	洗	墨	サ	A	4a	寄	乾隆19?	143	104	4265
71	トッダチ	2	107/未報告	雍正 3	1725	不	墨	サ	A	4b	寄		—	—	—
72	沖縄県博	館蔵品	上江洲9	乾隆 36	1771	洗	墨	サ	A	4b	寄		142	90	4180
73	沖縄県博	館蔵品	上江洲14	乾隆 43	1778	洗	墨	サ	A	4b	寄		142	93	4185
74	トッダチ	1	15/未報告	嘉慶 11	1806	洗	墨	サ	A	4b	寄		—	—	—
75	トッダチ	1	72/未報告	雍正 9	1731	洗	墨	サ	B	4a	寄		—	—	—
76	日本民藝館	館蔵品	/p7	嘉慶 12	1807	洗	墨	サ	B	4a	寄		144	—	4388
77	沖縄県博	館蔵品	/p 55写真8-3	—	—	1867	不	墨	—	B	5	寄	県博 2008	—	—
78	沖縄県博	館蔵品	上江洲15	同治 6	1867	洗	墨	サ	B	4a	寄		142	106	4186
79	大山上江家	—	13/III-7図13	乾隆 18	1750	不	墨	サ	A	5'	寄	昭和(1943)?	81	78	3383
80	ヤッチのGamma	9	15/39図3, 4	—	—	—	—	サ	A	5'	寄		129	—	—
81	野嵩真境名家	—	②/IV-4図20	—	—	—	—	墨	サ	A	5	入	86	—	3455

記載：刻字=刻。墨書=墨。朱書き=朱。刻字後に墨書、朱書するものも「刻」と記載。

材質：石灰岩=石。サンゴ石=サ。凝灰岩=凝。ニーピ=ニ。石質不明（石灰岩もしくはサンゴ石）=不。

形式：A=単層。B=二層屋根。

型式：本論1式～5式参照。式を省略。

屋根：入母屋=入。寄棟=寄。起り屋根=起。入母屋に宝珠鯪棟=入鯪。寄棟に宝珠鯪棟=寄鯪。宝珠鯪棟で入母屋か寄棟か判断ができないものを=鯪。蓋無し=—。

＜付表・凡例＞

①集成は、紀年銘を有する御殿形厨子で、写真や図などから形態の判別できるものを対象とした。

②掲載Noは図4～8と一致する。

③遺跡名は「墓」「墓群」「古墓」などは省略した。

④蔵骨器Noは博物館等の登録番号、調査における厨子に付された番号記載。これを/で分けて、報告書等掲載図書の図番号を記載した。

⑤基準紀年銘は、死去年と洗骨年が記されているものは洗骨年を基準紀年銘に示した。更に、複数の紀年銘を有する資料は、移葬年を除き新しい年号を基準紀年銘に入力し、備考にこれを併記した。

⑥記載：刻字=刻。墨書=墨。朱書き=朱。刻字後に墨書、朱書するものも「刻」と記載。

⑦材質：石灰岩=石。サンゴ石=サ。石質不明（石灰岩もしくはサンゴ石）=不。

⑧形式：A=単層。B=二層屋根。

⑨型式：本論1式～5式参照。式を省略。

⑩屋根：入母屋=入。寄棟=寄。起り屋根=起。入母屋に宝珠鯪棟=入鯪。寄棟に宝珠鯪棟=寄鯪。宝珠鯪棟で入母屋か寄棟か判断ができないものを=鯪。蓋無し=—。

⑪研究(1)は宮城2019の付表Noと一致。資料集(2)は宮城2021bのNoである。

A study on the urns of palace style (5)
- Chronological typology of the stone funerary urns (Ishizushis) -

Hiroki MIYAGI

Abstract

This paper is part of a series dealing with "urns of palace style". In the Ryūkyūs, funerary urns are called "*zushis*" (厨子).

In the previous articles of the series (1 to 4), a chronological typology was proposed for the ceramic urns of palace style. This paper will propose a typological chronology for the stone urns of palace style called "*ishizushis*" (石厨子). The analysis method was based on chronological data (funerary inscriptions) to perform a typological study. The sorting resulted in the establishment of a typological chronology for the *ishizushis*, with six (6) different types spanning from the second half of the 17th century to the 20th century.